

**[翻訳] エラスムス著・『幼子イエスについての説教』(翻訳・2)**

その他のタイトル	Cancio de puero Jesu (604.A 10.-610.A 9) Desiderius Erasmus
著者	中城 進
雑誌名	教育科学セミナー
巻	31
ページ	29-41
発行年	2000-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00019414">http://hdl.handle.net/10112/00019414</a>

## エラスムス著・『幼子イエスについての説教』(翻訳・2)

ロッテルダムのデシデリウス・エラスムス

【翻訳：中 城 進】

要するに、子供は偉大なものであり、また子供らしさ(82)は偉大な秘蹟であるのですが、それはイエス様がそれほどにも喜びとするからなのです。私たちの若さ(83)を軽蔑してはいけません(84)。その御方は真にその状態を高く評価しておられるのです。イエス様が高く評価したような子供たちの如くに自身たちがあるように私たちは大いに努力をいたしましょう。さらに言えば、その御方は、純真で、感受性に富み、素朴である子供たちを愛するのです。しかも、このような、神様に好まれる、子供らしさとは、年齢においてではなくて魂においてということなのですし、また時間においてではなくて性質においてということでもあるのです。例えば、逆の人間とは、つまり私たちが大いに避けようとしている種類の子供たちとは、顎には鬚が生えていなくとも、精神にはもじゃもじゃに鬚が生えている者であり、また成長していない年齢ではあっても、悪徳や狡猾さには熟年となっている者であるのです。要するに、それは、キリストによって承認されている、子供らしさという或る種の新しい在り方であるのです。それは、子供であること(85)ではなくて、子供らしさであるのです。つまり、それは、約言すれば、年を重ねている、或る種の子供らしさであるのです。それは、一般によく知られたように、“年数を数え上げる”というような年齢ではありません。それは、純真さであり、またその人の本性としての純朴さであるのです。ペテロはこのことを明らかに述べなかつたのでしょうか。彼はこのように述べております。「要するに、あらゆる悪意、あらゆる欺瞞、偽善、羨望、軽蔑を捨て

て、いま生まれたばかりの赤ん坊のように、理性的で、また欺瞞のない乳を熱望しなさい。それは、そのような成長を行なって、救済へと到るためであるのです」(86)。何故に、彼は「理性的で」と添えたのでしょうか。明らかに、それは愚かさを遠ざけるためであるのですが、大抵は、愚かさは若さと仲間となるのが常であるのです。何故に、彼は羨望や偽善やその他のそのような種類の悪徳、それらは老年の特性のようなものではあるのですが、を除こうとするのでしょうか。無論、キリストの子供たちは純朴さや純潔によって評価されるべきであって、生年で評価されるべきではないということを私たちは認識しております。このようなことに関して、パウロは、「悪意においては小児であり、これに反して考えにおいては完全でありなさい」(87)と述べております。その一方で、約言すれば、子供の時代そのものの中に生まれながらの或る種の善があるのです。それは、純真さに関しての或る種の影とか像のようなものであるのです。むしろ、それは希望であり、また将来の誠実さともなる天性的なものでもあるのです。すなわち、それはどのような状態にも柔軟で順応的な魂であるのです。それは純真さに関しての最高の監視人としての恥であるのです。それは悪徳を空虚と化す生来的なものであるのです。それは、身体的な魅力であり、また或る者の若き頃の芽吹く最盛時のようなものでもあるのです。そして、それは、認識することができないのですが、或る種の霊と類似したものとか親密なものとかでもあるのです。天使が出現する際にはたびたび、私たちの眼には、子供らしい外観を

取って現れるということは偶然に起こっているのではないのです。そればかりか、魔術師でさえも、魔法をもって霊を誘い出す時には、その霊を子供の身体の内へ呼び寄せ、と一般には言われています。敬虔で神聖なる祈願によって呼び出される時には、どれほど喜んで超自然の霊はそのような居所へと移ることでしょうか。

それ故に、これらの生来的である賜物に対して、もしも子供たちが最高で完全な子供の模倣に親しむようになれば、その時には、遂に、それらの子供たちは神に好ましくまた神に似つかわしい子供として見なされることになるでしょう(88)。いったい誰が、実際に、この功績を愛さずにいられるというのでしょうか。しかし、実に、その御方の真実の愛の力とは、その御方がこの愛しているものに対してできるだけ似ようと熱望するところにあるのです。もしもその御方の人間への愛が私たちの心の内に影響を与えるのであれば、どれほどに多量の熱意をもって私たちは神への愛へと競って駆り立てられることになるのでしょうか。私たちの愛情とその御方の愛情とを比較すれば、私たちの愛情は殆ど影のようなものではないのでしょうか。それ故に、もしも、実際に、ただ言葉だけでなく魂から真実にイエス様を私たちが愛するのであれば、私たちはイエス様を模倣することを勇敢に試みることになるはずで、というよりも、むしろ、イエス様のように私たちは自身を変形することになるのです。もしも私たちがその人間(89)に匹敵することができずとするならば、少なくともその子供(90)は子供たちによって模倣されることになるのです。しかしながら、このこと自体は、偉業であるのですが、全くどのようにも子供っぽいことではありませんし、さらに決して老人の卓越した機略でさえもありません。しかも、それは、子供によって行なわれるよりも、殆ど近づくことのできない豊饒さであるのです。

確かに、しばしば、人間の尽力がその手助けとして必要とされているのです。その際には、力強さや年齢や性というものが考量されることにもなります。ところが、このことは、生来的なものによってではなく、恩寵によって果たされることであるのです。また、肉塊の内在する闘争心や自信が少ない場合にこそ、その力強さをもって、霊の奇蹟は出て来るようになるのです。要するに、私たちによって模倣を試みられているその当の御方によって、私たちは形成され、造り上げられ、また変形されているのですが、そのことに関していったい誰が疑念を抱いたり、また疑惑を感じたりするというのでしょうか。

いったい誰が少年ダニエルにそれほどまでの分別をお与えになったのでしょうか(91)。いったい誰が少年ソロモンにそれほどまでの英知をお授けになったのでしょうか(92)。いったい誰がそれらの三人の少年たちにそれほどまでの寛容をお与えになったのでしょうか(93)。いったい誰が、神様の語りかけに相応しい、エリの子供をお造りになったのでしょうか(94)。いったい誰が少年ニコラウスをお造りになったのでしょうか(95)。いったい誰がアエギディウスをお造りになったのでしょうか(96)。いったい誰がベネディクトゥスをお造りになったのでしょうか(97)。いったい誰がアグネスをお造りになったのでしょうか(98)。いったい誰がカエキリアをお造りになったのでしょうか(99)。いったい誰が、このように多くのこのような若い娘に、それほどまでの男性的な力強さや征服し難い心の強さを委ねたのでしょうか。確かに、それは生来的なものではなくて、恩寵であるのです。生来的なものがあまり助けとならない時には、その際には驚くべきことに恩寵が下されることになるのです。従って、私たちは、恩寵を信頼するべきであって、強い精神で熱意をもって幼子であられるイエス様を自

分のものとするべきであるのです。

私たちは、観察するかのようにして、その御方から決して眼を逸らしてはいけません<sup>(99)</sup>。私たちは、完全な模倣を有しているのです、他の所にあるものを願望せねばならないということなどは決してありません。その御方のすべての生命は、私たちが服従すべきであることを明示している、と言えるのです。それでは、最も清純な処女から生まれた、最も純粋なる子供の生命が教えることとは、いったい何なのでしょう。それは、私たちはこの世界のあらゆる汚れや罪を避けるだけでは済まされない、ということであるのです。なお加えて、私たちは、地上における現在において天使のような生命の練習を実際に積むべきであるのです。このことは、常に将来あるであろう私たちの生命を私たちは熱心に求める、ということであるのです。それから、イエス様の聖霊はあらゆる汚れを退けますし、また嫌悪もなさるのですが、特に、獣の欲望、それは人間に全く相応しくない欲望なのですが、を退けて嫌悪なさるのです。また、イエス様が異なる国へとお生まれになることで、いったい何が私たちに教えられているのでしょうか。その御方は小屋でお生まれになり、飼葉桶の中に置かれて、ぼろぎれで包まれておりました<sup>(100)</sup>。それは、この世界に僅かな日数だけの滞在者であることを私たちは常に思い出すべきである、ということであるのです。つまり、私たちは、富を踏み付けるべきですし、この世界の偽りの名誉を軽蔑するべきですし、また敬虔なる辛苦をもって父の天上世界へと早く急ぐべきであるのです。そのためには、実際に、今、魂はその世界を生きるべきであるのです。それは、相も変わらずに、私たちの身体上は、この地上に足を触れたままの間ではあってもです。そして、イエス様がエジプトへと避難なされたことを通して<sup>(101)</sup>、いったい何が告げ知らされようとして

いるのでしょうか。それは、あらゆる点において汚された交際から私たちは避難するべきである、ということであるのです。私たちの内に在るイエス様を、つまりこのことは純真さやこの世界への無頓着さであるのですが、いったい誰が葬り去らせようと試みているのでしょうか。その御方の割札によって<sup>(102)</sup>、真にいったい何が教えられているのでしょうか。それは、私たちが、あらゆる肉塊の欲望、これはキリストに向かって急ぎ行くことを妨げるものであるのですが、を小さくし、またあたかも私たち自身を死人であるかのようにさせて、ただイエス様の聖霊のみによって駆り立てられ、刺激される、ということであるのです。神殿において生じたことを通して<sup>(103)</sup>、いったい何が教えられているのでしょうか。それは、私たちは、子供の頃から直ちに自身のすべてを神様や神聖なる物事に向かって、献身し、捧げるべきである、ということであるのです。また、それは、精神の皮殻がまだ新しいうちに絶えずイエス様を吸収する、ということでもあるのです。すなわち、幼すぎる者であるが故に、敬虔さを学ぶことに対して未熟であるということはありません。キリストを学ぶことに関しては、子供の頃よりも以上に時機の熟した他の時期というものは決してありません。それを逃すと、この世界で依然として知らないままで在り続けるようになるかも知れません。

続いて、あなた自身について、つまり子供たちのことについて、考えてみることに致しましょう。このように生まれて、また神に捧げられた、その子供は<sup>(104)</sup>すべての子供らしさを聖なる熱心さをもって過ごされておりました。その御方は、無為にお過ごしにならなかったし、無駄に食事もお摂りにならなかったし、戯言も仰らなかったし、馬鹿げた悪戯もなさらなかったし、愚かな噂もなさらなかったし、また放浪もなさ

らなかったのです。普通の子供が振る舞うように、その御方は、両親に従順であられ、聖なる祈願をなされ、教師たちに傾聴なされ、敬虔なる瞑想を行なわれ、そして同年輩の子供たちとの信心深くまた真面目な語り合いを行なっておられました。確かに、このような多数の同様のことを概説したものとして、掻い摘んで、聖ルカ(10)は次のように叙述しているのではないのでしょうか。「幼子は、ますます成長して強くなり、英知に満ちており、そして神の恵みがある上にあつた」(10)。あなたは新しき種類の子供らしさを明白に見ていないのでしょうか。太古の子供について、このような言辭があります。「愚かなことが子供の心の中につながれている」(10)。新しき子供(10)については、「英知に満ちており」ということを聴くことになりました。“賢明な”というのではなく、“英知に満たされた”この子供のことを聴く時に、いったい何をもって依然として幼い未熟さを楯に取ることができるのでしょうか。この子供があらゆる事物の秩序を逆にしたことを、あなたは見ました。『黙示録』において、その御方は、「見よ、わたしはすべてのものを新たにする」(11)と話されました。老人の英知は滅ぼされ、また分別を有するという者の分別は拒絶され(11)、そしてその子供は英知で満たされておりました。無論、この理由をもって、その御方はその父に感謝を捧げておられます。その御方は、「これらのことを英知を有するという者たちから隠して、またこの小児に示して下さいました」(12)と述べられました。さらに、実際に、私たちはこの世界において愚かでまた偽りの英知を熱望しておりますが、そのようなものを私たちは直ちに投げ出すべきであるのです。「そして、神の恵みがある上にあつた」(13)。その御方は、真に全く賢明であられるのですが、この世界においては分別がないようにもあられるし、そしてただ単にキリストに関しただけ賢明であられるのです。その御方は哲

学者の書物によっては知られてはおりませんし、スコトウス(14)の明敏さによっても知られてはおりません。しかし、その御方は、真実の信仰によって知られておりますし、希望によって理解されてもおられますし、また愛によって固く結び付けられてもおられるのです。

実際、真に、私たちは多くのことを教えられているのです(15)。その御方は、十二歳の時のことですが、つまり両親の下から密かに自らを去り行かせた時のことですが、その時には知人や親類の中で見つけられることがなくて、結局は三日間の後に発見されたのです(16)。しかし、それでは、何処でその御方は見つけられたのでしょうか。仲間の中でしょうか。舞踏の中でしょうか。道路とか広場とかでしょうか。子供たちよ、家出人のように両親の下から離れて、イエス様が見つけられた場所をお聞きなさい。その時には、あなたが行なうべきことの洞察に到るでしょう。「神殿の中で見つけられ、教師たちの中央にお座りになられて、彼らの話を聞いたり、また交替してお尋ねになったりしておられました」(17)と述べられております。イエス様は、このような驚嘆すべき行為によって、私たちに何を教えておられるのでしょうか。重要な事柄や真面目な事柄や模倣すべき事柄が教えられていた、ということをおぼろげに疑ってはなりません。しかし、それはいったい何なのでしょう。確かに、キリストは私たちの内において成長するのではないのでしょうか。キリストが私たちの内に生じて、そしてその御方の人生の歩みを有することになるのですが、それは私たちが完全な人間に到達するまでであり、またキリストが充滿した度合に到達するまでである、といえるのではないのでしょうか(18)。それ故に、キリストが私たちの内で成長した時には、私たちが親や友人に向けていた天性の情愛を神様へと移すべきであることを、その御方は教えてお

られるのです。また、キリスト以外には、私たちに、愛するものは全く何もなく、驚嘆すべきものも全く何もなく、またキリストが私たちのすべてである、ということをその御方は教えておられるのです。私たちの真の父や祖国や近親者や友人は天国に在ることを、私たちは思い出しましょう。しかし、このような両親への無頓着さは両親への冷淡さや不従順を意味している、と私たちは心に描いてはなりません。「そして、彼らに従順になられた」<sup>(119)</sup>ということになったのです。そのように無頓着に自身の両親に対する者<sup>(120)</sup>に比べれば、その者よりも、確かに、誰も自身の両親を真実に愛さないし、誰も自身の両親に大いなる敬虔さをもって敬意を表さないし、また誰も自身の両親に尊重した流儀をもって振る舞ってはおりません。ところで、「神殿の中で座っている」ということは、いったい何なのでしょう。神聖な状態の中で心を静めようとなさっていたのではないのでしょうか。また、学ぶことのために、精神をすべて平静にしておくことに注意を払っておられたのではないのでしょうか。これに反して、悪徳よりも混乱したものは何もあります。英知は静穏や平穏を愛するのです。さて、それでは、何故に、私たちは学ぶことを煩わしいものとするようになるのでしょうか。つまり、このことは、教師たちの言うことに対して私たちの耳を注意深く傾けるべきであるのか、という問いであるのです。天界のこの子供は、この御方は父なる神の英知であられるのですが、教師たちの中央にお座りになられて、相手の言うことをお聞きになられ、交替しては応答しておられたのです。つまり、たとえそのような応答によってその場のすべての人がその御方の英知に驚嘆させられていたとしても、彼はそのようになされていたのです<sup>(121)</sup>。このことは驚くべきことではありません。つまり、それは、その御方と比べれば、この世界のすべての知識は愚かなものである、

ということであったからです。法律の知識は立派な事であるし、哲学の知識は卓越した事であるし、また神学の研究は嘆賞すべき事ですが、しかしイエス様のことを拝聴することになりましたならば、それらはすべて愚かしいものとなるのです。しかもなお、私たちの応答は英知の奇蹟を築き上げることはできないのですが、少なくともそれは私たちに従順さを引き起こし、また純真さをもたらすことになるのです。さらに、私は切願するのですが、両親とか教師が教えることに対して、私たちは、気持ちよく応じ、また従順になるべきです。教師たちは、私たちの有する生来の親のように、重要な役割を果たすのです。その時には、すべての支配者であられるその御方は、両親によっては理解されていなかったのですが、それでも両親に服従してナザレへと戻られました。このような親への愛という債務を私たちは負っているのです。また、親への恭謙という債務を私たちは負っているのです。それ故に、たとえ私たちが彼らよりも優れているとしても、私たちはしばしば彼らの意思の下に降るべきであるのです。

それでは、続いて、ルカがイエス様の子供時代<sup>(122)</sup>をまとめ上げている適切な結論を傾聴することは価値のある労苦となります。「そして、イエス様は、英知や年齢を増し、神に愛され、また人間にも愛されました」<sup>(123)</sup>と彼は述べております。どれほどに多くのことを簡潔な言葉を通してその御方は私たちに教えていたことでしょうか。第一には、年齢の増加は敬虔さの増加と結び付いたものであらねばならない、ということですが、誰もが私たちに正當に言うことができないのですが、聖アウグスティヌス<sup>(124)</sup>は大多数の人間について「年齢を重ねる者は、不公正を重ねる」と述べました。しかも、私たちは、このような最も優れた論争を決して残したままにしてはいけませんし、また私たちは会得した

と思込まされてもいけません。そのようではなくて、競技場の走者の流儀のように、つまり背後を顧みることを放棄して、前方にあるものを得ようと努力するのです(12)。そして、終着点へと到るまでは、つまりこのことは“この人生が終局へと到達するまでは”ということであるのですが、常に良きものからより良きものへと、より良きものから最高に良きものへと前進することを試みることです。ソクラテス(13)は、十分に老年になった時でも、殆ど全く何も知らない者と同様に、常に誰彼の別なくその人から学ぶことを渴望しておりました。私たちが同様にあるべきです。私たちの内のキリストがさらに大きくなるのなら、この限りにおいて私たちは自身をより気に入らないものとする事となるのです。もちろん、それは、真に、私たちの内のキリストが増大するという場合においてのみのことであるのです。特に、利己的であることは、勉学と敬虔さには黒死病となります。また、ファビウス(14)も同様のことを言うのですが(15)、早熟の才能を有する種類の者は学識とか純真さとかの果実に関しては殆ど熟することにはなりません。実際に、秩序は、神様におかれましても、また人間におきましても、無為に治まるわけではありません(16)。私たちの人生が神様のお気に入りとなるように労苦を支払うことが最優先のことである、ということを私たちは理解しております。それを行なう者は、人間の好意を自発的に生じさせることとなります。というのは、良習よりも優れたものは何もなく、またそれよりも愛らしいものは何もないのです。また、称賛は、むしろ、あまり欲しがっていない者に訪れる、としたものであるのです。

最も深く愛するべき、また最も熱心に模倣すべき子供の模範を、あなた方が吸収し模倣するために、私は簡潔に述べて来ました(17)。そして、確かに、私たちがその御方を模倣すればす

るほどに、ますます私たちはその御方を愛していると見做されるようになるでしょう。私たちが熱烈にその御方を、愛すれば愛するほどに、ますます私たちはさらに多く模倣することになるでしょう。つまり、このことは、私たちが貞潔であり、純潔であり、潔白であり、柔和であり、素朴であり、柔順であり、欺きから免れており、欺瞞を知らず、嫉妬を知らず、両親に従順であり、教師の言説を傾聴し、現世を軽視し、神様の事柄に取り組み、敬虔な書物に没頭し、私たちの自分というものを日々に良きものとなし、天によって認許され、人間に好まれ、また自らの良き評判の雰囲気をもってでき得る限り多数の者をキリストへと誘う、ということであるのです。私たちがこのこと(18)を不断に切望いたしましょう。また、私たちの手も足も駆使してこのことを試みましょう。これらのことを私は言いたいのです。そして、私たちの若さは瞬時にして走り去ってしまうものであるのですが、まだ私たちには若さというものがあるのです(19)。すなわち、ファビウスが正しく警告しているのでありますが、「最上のもは直ちにまた最初に学ばれるべきである」(20)ということ。キリストよりも以前に学ばなければならないものとは、いったい何であるのでしょうか。キリストよりもさらに善きものは決して有り得ないのではないのでしょうか。キリスト教徒はキリスト以外のもので他に学ぶべきものは全く何もないのではないのでしょうか。キリストを知っている生命は永遠であるのではないのでしょうか。その御方は、福音書において、父に語りかける時に、ご自身のことを証言しておられるのです(21)。もしも私たちがこのことを考量するのであれば、私たちは、いかなる時にも、私たちのひとり一人に正当に与えられている人間的能力に対して感謝を捧げることになります。そして、その御方に感謝を捧げることになれば、私たちは自身に益をもたらすことにもなるのです。また、私

たちが感謝をさらに多く捧げるようになれば、ますます私たちはもっと熱烈にその御方に愛を返すようになるのです。さらに、私たちがその御方にもっと多くの愛を返すようになれば、ますます私たちは生命の生き方においてその御方を模倣することにもなるのです。そして、私たちがその御方をより多く模倣するようになれば、ますます私たちは自ずとさらにもっと豊かなものとされるのです。

### [第三の部分]

しかし、とにかく、恐らくは、すべてを退けて、キリストと共に十字架を担うということを、このことは辛い兵役であるのですが、若干の者が引き受けるでしょう。しかしながら、記憶しておくべきことですが、最も親愛なる兄弟たちよ、キリストの世界とこの世界は本性上は全く異なっているのです。この世界は化粧を施した娼婦のようなものです。最初には、その外観は魅惑的であり、また金色のものとして私たちの前に現れます。その後、深く係わるにつれて、また近くで追究するにつれて、ますますそのすべてが忌むべきものとなり、不快なものとなり、嫌悪を催すものとなって来るのです。キリストは、これと全く異なったものであり、遠くから一瞥すると無骨なものとして見えます。また、十字架上のキリストや、見世物とされまた軽蔑されたその御方の生き方を私たちは見ます。しかし、もしも確信をもって精神をすべてその御方に投入するのであれば、その者は、この世界には穏やかなものは全くないし、確実なるものは全くないし、また愛するべきものは全くない、ということを見い出すことになるでしょう。もしも福音書において真実が真理を叙述していなかったならば、その御方はこのように仰るでしょう。「わたしの軛をあなたの上に負いなさい。そうすれば、あなたがたの魂に平安がもたらされるでしょう。というのは、わたしの軛は心地

よきものであり、また私の荷物は軽いからです」(39)。確かに、真に、このことは善きものへと向かうための困難な通路であるのです。キリストよりもさらに久しく以前の、ヘシオドス(40)は、「最初に接近する時には荒々しくあるのですが、常にまた容易にそして魅惑的に近付くのです」(41)といつも夢想して述べていました。しかし、それは、それほどまでに並はずれて大きく、またこれほどまでに確実である報酬へと向かうための通路であるのですが、それではいったい何が荒々しいものとして思われ得るのでしょうか。もしも私たちが賢人の言説、つまり「報酬への希望は鞭の暴行を減少させる」ということですが、に従うのでありましたならば、いったい誰がこの束の間の生命を儂いものではなく、また好ましきものとして考量するのでしょうか。それによって、天界での生命を、つまり決して終わることのない生命を、或る者はもたらされることになるのです。そこでは、その者は、キリストと共に永遠に支配し(42)、最高に善きものへと不断に眼を向け、仲間である天使たちと在り、またすべての害悪の恐怖から遠く離れているのです。いったい誰が、六百回の死を引き換えにしてでも、このような報酬を懇願しないのでしょうか。しかし、このことは、私たちの最高指揮官のイエス様によってその兵士たちに約束されている大きな贈物であるのです。その御方は、欺くこともできないし、また偽りをも知らないのです。実際に、このような短い兵役の時間に対して、不滅で偉大な果実を手にするのを、あなた方は自身で自発的に判断するのです。確かに、人間自身の生命は全く永くはありません。ほんの僅かな時間だけに現れる蒸気のようなものであり(43)、またほんの一時の夢に他ならないものとは、いったい何なのでしょう(44)。

とにかく、それでは、私たちは、評価し難い

ほどのこの報酬のことに關しては黙することに  
して、次に、私たちの指導者がその兵士たちの  
労苦に対してその生命をもってしても代償する  
という過度に豊富な利得を追究することに致し  
ましょう(44)。つまり、この世界においてその兵  
役に服務する者たちやイエス・キリストの下で  
奉仕する者たちによって収穫された収穫物とは  
いったいどのようなものであるのか、というこ  
とを私たちは追究することになります。私たち  
は英知の本において不信心な者が自ら言うこと  
を聞くことができます。「我々は、不当な道で  
疲労させられているし、破滅への危険な道を行  
軍しているし、しかも支配者への道に不知でも  
ある」。この世界は化粧を施した善きものとし  
ての幻影をもって誘惑するのです。それは毒薬を  
蜂蜜と言うこと以外の何ものでもありません。  
すぐにそれに携われれば、言うならば模範とでき  
ない者ようになってしまえば、ああ不滅の神  
様、その者はいったい何を世話することになる  
のでしょうか。いったい何を心配することになる  
のでしょうか。いったい何を不安に感ずること  
になるのでしょうか。いったい何を損失とす  
ることになるのでしょうか。いったい何を恥辱  
とすることになるのでしょうか。いったい何を  
罪の意識による呵責とすることなのでしょうか。い  
ったい何を不幸に導くような嫌忌するべき結末と  
することなのでしょうか。既に、不信心な者が不敬ゆ  
えに非常に厳しい罰を受けているように、たと  
え誰も地下世界に未だに行ってはいないにして  
もですが、私たちには思われるのです。しかし、  
この世界の化粧を拒絶する者は、イエス様（こ  
の御方は最高に善きものであるのですが）の内  
にすべての愛情やすべての注意やすべての献身  
を注ぎ込むことになるのです。その御方に全面  
的に従属する者は、福音書での約束に従って永  
遠の生命を手に入れるだけではなく、またこの  
俗界においてさえも百倍のものを受け取るこ  
ともなるのです(44)。しかし、百倍のものを受け

取るということとは、いったい何であるのでし  
ょうか。すなわち、それは、化粧されたものの  
代わりに真実の善きものを、不確実なるものの  
代わりに確実なるものを、儂きものの代わりに  
永遠なるものを、毒薬を混入されたものの代  
わりに純粹なるものを、苦悶の代わりに静穩を、  
心配の代わりに信頼を、混乱の代わりに平穩を、  
損失の代わりに利益を、破廉恥の代わりに潔白  
を、呵責の意識の代わりに秘密であってまた言  
い表し難いような喜びを、また見苦しくも不幸  
なる死の代わりに名誉と勝利に満ちた死を受け  
取ることを意味しているのです。あなたがキリ  
ストの愛のために富裕を退けることになると、  
あなたはその御方の内に真実の宝物を見つける  
ことになるでしょう。あなたが偽りの名誉を拒  
絶することになると、あなたはこのこの内に  
さらに大きな誉れを獲得することになるでし  
ょう。あなたが両親への愛情を軽視すること  
になると、あなたはあなたの真実の父（この御方は  
天国におられるのですが）にさらに慈悲深く愛  
護されることになるでしょう。あなたがこの世  
界の英知を無なるものとして認めることにな  
ると、あなたはキリストの内にさらに賢明な真実  
なるものを、またさらに豊饒なるものを見つ  
けることになるでしょう。あなたが有害なるも  
のを意志をもって遠ざけることになると、あなた  
はその御方の内に他の楽しみをたくさん見  
つけることになるでしょう。簡潔に言えば、その御  
方はお隠れになっておられるのですが、実際に  
この世界の闇を追い払うキリストの行為を私  
たちが理解する時に、私たちはかつて私たちに笑  
いかけたりまた不安にさせていたすべてのもの  
を驚嘆して見なくなるだけではなく、同様に黒  
死病から逃げ出したり忌避したりするかのよう  
にそれらから遠ざかるようになるのです。確  
かに、驚くべき方法をもってそれは起きるの  
です。つまり、それは、天界のその御方の光が私  
たちの魂の内部にまで達するや否や、直ちに私

たちのすべての事物に対しての見方にそのようなことが起きるのです。それ故に、しばらく前までは甘いものとして思われていたものが、今では苦いものであるのです。苦いものが甘くなるのです。戦慄すべきものが魅惑するものとなるのです。魅惑するものが戦慄すべきものとなるのです。かつて輝くものが汚いものとなるのです。勢力のあるものが無力なものとなるのです。美しいものが醜いものとなるのです。卓越するものが劣等なものとなるのです。豊かなものが貧しきものとなるのです。優れたものが卑しきものとなるのです。利益が損失となるのです。賢きものが愚かなものとなるのです。生が死となるのです。願わしいものが、それとは逆の、忌避すべきものとなるのです。確かに、突然に、事物の見方は変化するのです。以前に或るものとして理解されていたものが、全く異なるものとして判断されることになるのです。それ故に、見方の変化を遂げた者たちは、唯一、キリストの内に、約めて、すべての善きものを実際に見い出すことになるのです。この世界は、空虚であり、また虚偽の像やら影を見せているのです。それはまるでペテンのようなものです。哀れな死すべき者の大半は、精神の大変な混乱や多くの損失や多くの危険を伴って、掟と非道との間でそれらのものを追求させられているのです。

お聞かせ願いたいのですが、次に言及する魂と比較することのできる至福というものが有り得るといえるのでしょうか(43)。その者とは、既に、誤謬から自由であり、また欲情からも自由であり、心配もなく、常に良心の証とすることをもって喜び(44)、決して不安な事物もなく、高きところにあり、空中にあり、最も天に近いところにあり、また既に人間の身分を越えているのです。また、その者は、キリストの最も高い岩に支えられており、この俗界における化粧された

ものや騒動や騒乱のすべてをその高みから嘲笑し、軽視し、またむしろ憐れんでさえもいるのです。それにも拘らず、神という庇護者を有している者がいったい何を恐れているのでしょうか。それは不名誉でしょうか。しかし、キリストに対しての不名誉を苦しむことは最高に栄誉なことです。それは貧困でしょうか。しかしながら、キリストに向かって急ぐ者は財産という重荷を喜んで投げ捨てます。では、それは死であるのでしょうか。しかし、その者は永遠の生命へと到達するということを知っているのですから、それは最大の願望であるのです。天界の父がその毛髪でさえも数えるという人間(45)を不安にさせる事物とはいったい何であるのでしょうか。さらに、キリストの内にすべてのものを手に入れる者にとって、いったい何が熱望されるものであるのでしょうか。すなわち、その一員と首領に共通のものでないものとはいったい何なののでしょうか。実際、真に、人間の至福とはいかに大きなものとしてあるのでしょうか。また、実際に人間の尊厳も大きなものとしてあるのです。至福に到った人間は、教会の最も聖なる身体、生命を有する一員としてあるべきであり、同様にキリストと共に在って、キリストと同様の肉体を有し、キリストと同様の精神を有し、その御方と共通の天の父を有するべきですし、きょうだいとしてキリストを有し、その御方と共通の遺産を定められているのです(46)。簡潔に言えば、至福に到った人間は、既に人間では有り得ずに、神である、と言えるのではないのでしょうか(47)。将来の至福を試食することを、これに加えることです。敬虔なる精神は時々はそのようなものを感じるのです。確かに、予言者はこのことを感じたように思われますが、その際には、彼は、「[耳は聞こえず、目も見えず、人の心に思い浮かびもしなかったことを、神様は、ご自分を愛する者たちのために備えられた]」(48)と言いました。それ故に、最も愛すべき

仲間たちよ、もしも私たちが真実のキリストの  
一員であることに心を砕くならば、その予言の  
言説に従って、「正しい者はなつめやしの木の  
ように栄える」(49)のですし、またこの生命にお  
いてさえも私たちは或る種の永久の青春を芽ぐ  
むのです。それは、魂だけでなく、また真に身  
体においてもであるのです。何故にかと言え  
ば、花が咲き乱れたかのようなイエス様の精  
神が私たちの精神へと流れ込むことになれば、  
その次には交替して私たちの精神がその御方  
の身体へと流れ込むことになるのです。それ  
は、私たちの精神がその御方の内へと変化さ  
れ得る限りで、ということです。そのような光  
り輝く魂と身体は汚れた衣服を着ることはあ  
りません。すなわち、私たちの魂は神様の住  
家であり、また魂の住居は身体であるのです。  
従って、衣服はある程度までは身体自体の  
身体であるのです。それ故に、頭脳に純潔さ  
をもたらす者にはすべて、それはこの生命が  
完了して不死へと向かって導かれる限りとい  
うことですが、そのようなことが生ずるの  
です。

### [結論]

このようなわけで、それ故に、最良の戦友  
たちよ、このように大きな至福へと向かって  
私たちの最善の力をもって私たちは努力しま  
しょう。私たちの指導者であるイエス様の  
みを私たちは賛美しましょう。その御方の  
他には偉大なものは何も有り得ないの  
です。その御方のみを私たちは愛しまし  
ょう。その御方の他には善きものは何  
も有り得ないので、むしろその御方なし  
には絶対に何も偉大なものは存在しな  
いのです。その御方のみを私たちは愛  
しましょう。その御方の他には善きもの  
は何も有り得ないので、むしろその御  
方なしには絶対に何も偉大なものは存  
在しないのです。その御方のみを私  
たちは模倣しましょう。その御方の  
みだけが真実で完全な敬虔さの模倣  
であるのです。その御方を除外しては、  
賢明である誰であろうとも、そのすべ  
ての者が分別を有していないのです。  
私たちは、その御方だ

けに愛着し、その御方だけを抱擁し、その御  
方だけに喜びを見い出しましょう。その御  
方の内に、真実の平和や喜びや平静や快  
さや生命や不死があるのです。どれほど  
に多くのものがあるのでしょうか。最も  
善きもの内には、あらゆるものがある  
のです。私たちは、その御方の他には  
誰も尊敬せず、誰も愛さず、また誰も  
愛さないようにして、その御方のみに  
喜ばれるようにその御方を熱心に求め  
ましょう。その御方の眼差しの下に私  
たちは在るということを、また私たち  
が行なうことのすべてに關しての証人  
としての役割を果たしているその御方  
の天使たちの下にも私たちは在るとい  
うことを、私たちは記憶しておきま  
しょう。その御方は、渴望する人であ  
り、この世界の誰の汚れであろうとも  
許さないのです。そして、そのこと故  
に、その御方の内に、潔白でまた天使  
のように私たちは生命を生きましょ  
う。私たちの心の内に、口の内に、そ  
してすべての生命の内にその御方が  
居られるように生きましょ。その御  
方を内部まで私たちは理解し、その御  
方について私たちは語り、その御方  
の生き方を私たちは模倣しましょ。そ  
の御方の内に、為すべきことや静穏  
や喜びや慰安や希望や守るべきこと  
などのあらゆるものを私たちは見付け  
出しましょ。私たちの魂が眠り込まず  
にあるのならば、その御方は決して  
遠ざかることはないのです。その御  
方は私たちの魂が眠っている時に訪  
れるかも知れないのです。私たちの著  
述の内にも、また遊びの内において  
さえも、その御方は感じられるもの  
であるのです。その御方を通して、  
またその御方の内に、私たちは成長  
するのですが、それは完成された人間  
に到達するまでです(50)。熱心に  
その兵役を終えてから、私たちは天  
国においてその御方と共に永久の勝  
利を祝うのです。語り終えました。

【注釈】

- (82) *pueritia*. 原典の内容を損なわないで翻訳することを心がけた結果、ここの文脈では「*pueritia*」という用語を「子供らしさ」として翻訳することにした。しかし、後の文章の、別の文脈においては、「子供らしさ」という用語よりも「子供時代」という用語を使用して翻訳した方が原典の内容を損なわないと判断したところがある。その部分においては、翻訳者は「*pueritia*」という用語を「子供時代」と翻訳した。
- このような苦心には翻訳者なりの理由がある。「*pueritia*」というラテン語を、近代的な教育思想に基づいて、安易に「子供時代」とか「子供の期間」とか「子供期」とか「幼児期」という用語を用いて翻訳してしまうと、読者に誤読をさせてしまうのではないかという恐れを翻訳者は有しているからである。近代教育思想の観点から、つまり発達の主体形成論の観点から、エラスムスの議論を解釈し直せば、誤読を犯すことになる可能性が非常に高くなる。近代教育思想を無批判に保持する者は、エラスムスの議論の文脈を無視して、発達の観点から「子供時代」とか「子供の期間」とか「子供期」とか「幼児期」という用語を無批判に使用したくなるであろう。そして、その者は、“エラスムスは、人生を新生児期や小児期や幼少期や幼児期や少年期や青年期というような時期に分けて、発達の視点から考察している”という誤読を犯してしまうかも知れない。しかしながら、このような近代教育思想の観点からの強引なまでの誤読は、エラスムス本来の議論を無視し、拒絶することになる。エラスムスの著作で主張されていることは、人生を時期に分割することではなく、暦年齢を越えたところでの人間の在り方の議論である。つまり、エラスムスは、人間の在り方としての、純真さや純朴さについて

の議論を行なっているのである。

- (83) *aetas*.
- (84) 『テモテへの第一の手紙』、第四章一二を参照。
- (85) *puerilitas*. この用語は、エラスムスの文脈から判断すれば、外観としての子供という意味で解釈できる。それ故に、私は、「*puerilitas*」という用語を「子供であること」と翻訳することにした。
- (86) 『ペテロの第一の手紙』、第二章一～二を参照。
- (87) 『コリント人への第一の手紙』、第一四章二〇を参照。
- (88) 原典では改行はない。ここの文章から、子供時代のイエスの模倣を勧めることに関する論述となっているので、翻訳者の意志によって改行を設けることにした。
- (89) イエスのことを指している。
- (90) 子供時代のイエスのことを指している。
- (91) 『ダニエル書』、第二章一九を参照。原典では改行はない。この文章から以後に使用される疑問詞が指し示す対象と、この文章の直前の文章の疑問詞が指し示す対象とが異なっていたので、誤読を招かないために、また文体も変わったこともあって、翻訳者の意志によって改行を設けることにした。
- (92) 『列王紀上』、第三章五～一五を参照。
- (93) 『ダニエル書』、第三章二三～二五を参照。
- (94) 『サムエル記上』、第一章一一～二〇を参照。
- (95) *Nicolaus* : ?-345/352. ニコラウスは、ミラの司教であり、聖人でもある。
- (96) *Aegidius* : ?-720?. アテナイ出身のベネディクト会修道士であり、十四救難聖人の一人である。
- (97) *Benedictus* : 480?-547/550. ベネディクトゥスは、修道院制の確立者であり、聖人でもある。
- (98) *Agnes*. 三～四世紀初頭。アグネスは、ローマの殉教者であり、聖人である。
- (99) *Caecilia*. 二～三世紀。カエキリアは、ローマの殉教者であり、聖人である。

- (100)原典では改行はない。この文章から以後は、  
“幼子イエスの生命は私たちに何を教えているのか”という議論となって来たので、その文脈を重視して、翻訳者の意志によって改行を設けることにした。
- (101)『ルカによる福音書』、第二章六～七を参照。  
(102)『マタイによる福音書』の第二章一三～一五を参照。  
(103)『ルカによる福音書』、第二章二一を参照。  
(104)『ルカによる福音書』、第二章四一～五一を参照。  
(105)イエスのことを指している。  
(106)ルカ (Lucanus) とは、新約聖書に登場する人物であり、『ルカによる福音書』や『使徒行伝』の著者とされている人物でもある。  
(107)『ルカによる福音書』、第二章四〇を参照。  
(108)『箴言』、第二二章一五を参照。  
(109)イエスのことを指している。以下、イエスの子供の頃のことが論述されている。  
(110)『ヨハネの黙示録』、第二一章五を参照。  
(111)『イザヤ書』の第二九章一四、『コリント人への第一の手紙』の第一章一九を参照。  
(112)『マタイによる福音書』の第一章二五、『ルカによる福音書』の第一〇章二一を参照。  
(113)『ルカによる福音書』、第二章四〇を参照。  
(114)スコートゥス (Duns Scotus, Joannes : 1264 [65?]-1308) とは、イギリスの後期スコラ哲学者であり、神学者でもあり、「精妙博士」と呼ばれた。  
(115)原典では改行はない。この文章から以後は、十二歳の時のイエスの失踪が話題となったので、その文脈を重視して、翻訳者の意志によって改行を設けることにした。  
(116)『ルカによる福音書』、第二章四一～五一を参照。  
(117)『ルカによる福音書』、第二章四六を参照。  
(118)「わたしたちすべての者が、神の子を信じる信仰の一致と彼を知る知識の一致とに到達し、

- 全き人となり、ついに、キリストの満ちみちた徳の高さにまで到るためである」(『エペソ人への手紙』、第四章一三)。
- (119)『ルカによる福音書』、第二章五一を参照。  
(120)イエスのことを意味している。  
(121)“最高の英知を有しているイエスであっても、教師の話聞いておられた”ということのエラスムスは言いたい。  
(122)注釈の(82)を参照。  
(123)『ルカによる福音書』、第二章五二を参照。  
(124)アウグスティヌス (Augustinus, Aurelius : 354-430) とは、ヒッポの司教であり、また古代最大の教父である。  
(125)『ピリピ人への手紙』、第三章一三～一四を参照。  
(126)ソクラテス (Socrates : B.C.470?-399) とは、古代ギリシアの哲学者である。  
(127)ファビウス (Marcus Fabius Quintilianus : 34?-96?) とは、『弁論家の教育』を執筆したクインティリアヌスのことである。  
(128)クインティリアヌス・小林博英 (訳)、『弁論家の教育・1』、明治図書、一九八一年、四三頁 (第一巻、第三章、三) を参照。  
(129)“学識や純真さを有して、秩序に満ちた人間に形成されるためには、天性の素質のままに成長をさせられるだけではなく、様々な労苦が人間には必要とされている”ということのエラスムスは言いたい。  
(130)原典では改行はない。文脈の変化に従って、翻訳者の意志によって改行を設けることにした。  
(131)「このこと」とは、“幼子イエスの在り方を愛し、模倣すること”を意味している。  
(132)この著作を読むであろう少年たちに対して、エラスムスは言及している。  
(133)クインティリアヌスの『弁論家の教育1』の第一巻第一章三六 (三四～三五頁)、『弁論家の教育2』(クインティリアヌス、小林博英

(訳)、明治図書、一九八一年)の第一一巻第二章四一(九三頁)を参照。

(134)「永遠の命とは、唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがかわされたイエス・キリストとを知ることであります」(ヨハネによる福音書、第一七章三)。

(135)『マタイによる福音書』、第一章二九～三〇を参照。

(136)ヘシオドス(Hesiodos:前七百年頃)とは、古代ギリシアの叙事詩人である。

(137)ヘーシオドス、松平千秋(訳)、『仕事と日』、岩波書店、一九八九年。二九一～二九二行を参照。

(138)『ヨハネの黙示録』、第二〇章四～六を参照。

(139)『ヤコブの手紙』、第四章一四を参照。

(140)人間のことを意味している。

(141)原典では改行はない。論題の変更に従って、翻訳者の意志によって改行を設けることにした。

(142)『マタイによる福音書』、第一九章二九。

(143)原典では改行はない。文脈の変化に従って、翻訳者の意志によって改行を設けることにした。

(144)『コリント人への第二の手紙』、第一章一二を参照。

(145)『マタイによる福音書』の第一〇章三〇、『ルカによる福音書』の第一二章七を参照。

(146)注釈の(46)を参照。エラスムスは、現世におい

ても、人間が至福に到る可能性を説いているのではないだろうか。翻訳者には、この文脈を読む限り、そのように解釈できる。エラスムスは、当時のキリスト教の教義から判断すれば、きわめて危険な思想を抱いていたのではないだろうか。“恩寵と自力によって、現世にあっても、人間は至福に到ることができる”。このような思想は、ピコ・デッラ・ミランダラの思想を私たちに想起させる。

(147)エラスムスは、「至福に到った人間は、既に人間では有り得ずに、神であると言える」とまで言及している。これは正に神人である。

(148)『イザヤ書』の第六四章四、『コリント人への第一の手紙』の第二章九を参照。

(149)『詩篇』、第九二章一二を参照。

(150)「わたしたちすべての者が、神の子を信じる信仰の一致と彼を知る知識の一致とに到達し、全き人となり、ついに、キリストの満ちみちた徳の高さにまで到るためである」(『エペソ人への手紙』、第四章一三)。

\*\*\*当翻訳において使用されたテキストは、1704年に印刷されたライデン版からの、1962年の復刻版である。

Erasmus, Desiderius, *Concio de puero Jesu. Joannes Clericus (Ed), Desiderii Erasmi Roterdami Opera Omnia*•Tomus V, Hildesheim: Georg Olms, 1962. 599-610 (604.A 10-610.A 9).